

## <講演要旨>

関西医科大学名誉教授 螺良愛郎先生

### 「乳癌の基礎—その実験的制御」

乳腺は哺乳類の象徴である。乳腺から発生する乳癌は実験モデルを駆使すればその修飾因子が明瞭となり、予防あるいは治療法確立の一助となる。疫学はヒト乳癌の制御にとって示唆に富むデータを提供する。修道女に乳癌が好発する観察から妊娠の関与が示唆される。この現象はラットの実験系で再現され、妊娠あるいは妊娠を模倣するホルモン環境を作製することにより乳癌制御が可能である。国別の乳癌罹患率の違いから食生活の影響が推定される。水産脂質や植物化学物質の乳癌制御効果は実験モデルで再現される。これら諸因子は乳癌抑制に有益であるが条件によっては有害事象の出現をみる。ヒト乳癌の制御には精緻な実験の詳細な解析は必須事項である。

関西医科大学乳癌外科前教授・現 星光病院理事長 山本大悟先生

### 「乳がんの臨床」

乳がんは、乳房に生じるがんで、日本の女性がかかるがんの中でもっとも多いがんです。一方で乳がんは早期発見・治療ができれば5年生存率は90%以上となりますが、進行すると周囲のリンパ節や肺・骨・脳・肝臓などの重要な臓器に転移を起し、死に至る場合があります。そのため、近年では早期発見・治療のためにさまざまな取り組みがされています。主な原因には女性ホルモン“エストロゲン”の関与や肥満、飲酒、喫煙などの生活習慣が挙げられるほか、乳がんの患者さんのうち5~10%は遺伝性であるといわれており、遺伝的な要因で乳がんにかかりやすい方もいます。今回は乳がんの最古の歴史から最新の治療まで幅広くお話したいと思います。